



妖魔戦線
菊地秀行
光文社（新書）
（5／20刊・¥680）

菊地流バイオレンス小説。アダルト向きの第二作目にあたる。妖魔との交合シーン（スーパーセクシュアル）、すさまじい惨殺シーン（スーパーバイオレンス）——帯の惹句風の以上二点は、現在のこの類の小説に欠かさない要素だから、もちろん本書にも含まれている。やたら強い筆法の達人と、得体の知れぬ妖魔との戦い。主人公は、飄々としており、他方どこか翳りを秘めている。この図式は、夢枕獏とも大きく違わない。ただ、趣向は——西欧型悪魔と、悪魔を呼び出す黒魔術師、悪魔を兵器として輸出しようとする死の商人たちと——、肉体を強調するヒーローアクションとは、やや雰囲気異にする。

悪魔を呼び出す儀式と言え、これはむしろ英米流のモダンホラー的。加えて、血が流れ（すぎ）、首や手足が（過剰に）乱れとぶ痛快さは、B級映画群でおなじみだ。菊地秀行の世界には、どろどろした部分が少なく、さらりとした娯楽性がある。著者の嗜好を反映したものと考えられる。

ところで、シリーズとは書かれていないけれど、やっぱりシリーズなんでしょうね、この終り方では。